

少しずつ、しかし、休むことなく進むキューバの改革

2006年7月フィデル・カストロ議長が病気となり、権限をラウル・カストロ第一副議長に移譲してから、7年が経過しました。権限を委譲されたラウルは、すぐさま「経済の構造的な改革」が必要で、労働人口の80%を占める公務員が賃金だけで生活できるようにする必要があると述べました。ラウルは、キューバ経済の問題の深刻さを適切に認識していることを示したのです。しかし、ラウルは、2008年2月、政権移譲後の最初の国会議員選挙を終えて、急速な改革を期待する内外の記者を前に、「この選挙は、重要な一歩である。これまでと違った複雑な段階で、いろいろ重大なことを決めなければならないが、それはスコージずつである」と答えたのでした。ラウルの性格を反映して、改革は、事前に十分、党大会最終日のフィデルとラウル集団的に討議し、決定したら断固として実行するというスタイルが取られています。



まず、ラウルは、キューバ社会の現実にそぐわなくなっている不要な禁止事項の廃止から着手し、外貨販売店での家電の購買、一般市民の携帯電話の使用、市民の外貨支払ホテルの宿泊を許可しました（08年3月）。さらに、08年7月には、未利用の国有地の使用権を農業・牧畜生産用に個人あるいは法人に貸与し（使用期間は、個人10年、法人25年）、10年4月には実験的に国営の3席以下の理髪店、美容院を従業員に貸出す、請負制度を採用しました。10年9月には、100万人とみられる積年の公務員の過剰人員問題の解決に取り組むことを発表しました。

10年11月には、改革の総路線を示すものとして、第6回党大会討議資料「経済・社会政策路線案」が公表され、翌年11年4月キューバ共産党第6回大会で「党と革命の経済・社会政策路線」として討議されて、同年7月、国会で313項目に上る「党と革命の経済・社会政策路線」が承認されました。また、党大会では、また、党と政府の幹部の任期は2期最高10年とし、幹部の若返りが提案されました。



改革総路線パンフ

同年9月には自動車の売買が、11月には住宅の売買・譲渡が許可とされました。また、自営業者が従業員を雇用することを許可し、これまで革命の中で経験しなかった労働搾取の問題が新たに出てくることになりました。さらに、余剰公務員100万人の転職の受け皿として自営業種を181業種に拡大しました。自営業種は、その後さらに拡大され、199業種となり、現在では、436,342人（2010年には157,000人）が従事しています。

また、同年11月には各種の農業協同組合が、農産物を直接観光機関に自由販売することが許可され、国営の個人サービス、技術サービス、家庭向けサービス業種が請負業で運営

されることが正式に承認され、翌 12 年の 11 月から国営の飲食店が実験的に請負制度に移されました。

2012 年になると、3 月、農業部門以外でも協同組合を設立することが決定され、13 年 4 月に 124 組合、同年 9 月 73 組合が結成されました。また、12 年 7 月経済改革で再編された経済制度に対応するように、新税租税法が承認されました。そして 10 月には、新出入国管理法が公布され、キューバ国民の出入国が原則自由になりました。11 月には、土地使用権貸与地での住宅の建設、生産に関連する施設の建設が認められ、貸与最大面積は、67ha まで拡大されました（13 年 2 月末までに 17 万人に 15 万ヘクタールが貸与されています）。

懸案の指導部の若返り策としては、13 年 2 月、国会で国家評議会・閣僚評議会第一副議長



ディアス・カネル副議長

にミゲル・ディアス・カネル(52 歳)が、新たに選出されました。さらに企業の自主管理を高めるために、4 月に企業は納税後利益の 50%を運営資金、投資、従業員へのボーナスなどに自由に処分できることになりました。また 5 月には、不要な禁止事項の廃止の一環として、キューバ人の電気製品の国内持ち込み制限が緩和されました。10 月には、キューバ国営観光旅行社が、外国人観光客用に、国内の民間レストラン、民間宿舍と契約することができるようになりました。

さらに、同月、懸案の問題である、二重通貨問題の解決に着手することが発表されました。現在キューバには、一般に賃金で受け取るキューバ・ペソ(CUP)と外貨ショップ用の交換ペソ(CUC)の二種類の通貨が存在し、交換レートは、1CUC=24CUPです。このため、キューバ企業の原価計算、市民の生活水準の計算に困難をもたらしています。この問題の解決は、複雑な経済問題が関係しており、解決には 2 年程度かかるものと考えられています。



左側が CUC 紙幣で右側が CUP 紙幣

これまでは、改革は、主として社会・経済生活面で不要な規制・禁止条項を撤廃したり、農業生産の不振を克服するための未利用地の耕作権の貸与、過剰公務員の受け皿としての自営業の拡大、不要な国の経済活動への関与をやめるための請負制の導入など、経済面で進められてきました。

新たな分野での改革

スポーツ選手のプロ入り許可

しかし、今年になると、経済以外の面でも、改革が行われるようになってきました。6 月、キューバ政府は、プロ野球のカリブ・シリーズに復帰することを決定しました。カリ



レズで活躍するチャップマン

ブ・シリーズは、1949年に創設され、キューバは1960年に脱退するまで7回優勝していました。このシリーズには、ペルト・リコ、ドミニカ共和国、ベネズエラ、メキシコが参加しています。さらに、8月には、一歩進んで、キューバ政府は、野球、ボクシング、バレーボールの選手やコーチが、キューバ国内の重要な試合には帰国したり、国際試合ではキューバ代表としてプレーするという条件で、米国を除きプロ契約をできることにしました。収入は、全額、選手、コーチ、トレーナー個人のものとなります。この措置は、近年少なからずの有力な野球選手やボクシング選手が、米国に「亡命して」収入の高いプロ野球、プロボクシングに流れていることに対応したものです。

芸術活動の自由

9月になると、ジャズ音楽歌手のロベルティコ・カルカセス（41歳）が、ハバナ市の米国利益代表部前で政府主催により行われた数千人の政治集会のコンサートで、「もっと通信の自由が欲しい、例えば大統領の直接投票。党员も反体制派も同じ権利だ。経済封鎖も自己封鎖も止めよ」と即興で歌う事件が起きました。この集会は、米国で不当に長期拘置されているキューバ人5人の早期釈放を要求する政治集会でしたので、たちまち大きな社会的反響を呼び、ロベルティコとそのグループは、翌日キューバ政府により、無期限の公演禁止に処罰されました。

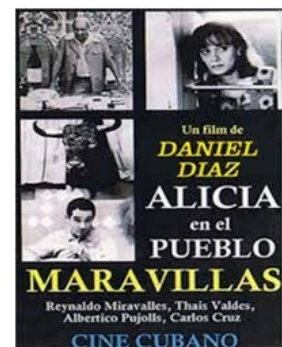
問題の後、ロベルティコ（左）と共演するシルビオ（右）→



これまでのキューバでしたら、ロベルティコの音楽活動生命はこれで終わっていたかもしれません。しかし、すぐさま、キューバ・ポピュラー音楽会の重鎮、シンガーソングライターのシルビオ・ロドリゲスが介入し、文化省の担当者と話し、「ロベルティコは、場所をわきまえず、自分の考えを歌にしたが、芸術家の表現の自由は認めなければならない。公演の禁止は不当であり、自分のバンドで共演する」と抗議しました。すると、文化省は、ロベルティコとそのグループの処罰を撤回しました。キューバの芸術表現の寛容さが見られるようになった事件でした。

芸術評価の政治からの自由

9月の同じ頃、キューバ映画界の社会派の巨匠、ダニエル・ディアス・トレス監督が死去しました（享年64歳）。ダニエル・ディアス監督といえば、1990年に「マラビジャス村（素晴らしい村、不思議の国のパロディ）のアリシア」という政治風刺映画を監督し、「非常時」にあるキューバ社会の悲惨な状況を赤裸々に描いて物議をかもしました。キューバ国内では、フィデルに批判され、ほとんど上映されなかった作品でした。



しかし、ダニエルの死去に際し、キューバ共産党中央機関紙のグランマ紙は、「ダニエルにとって芸術の批判的機能は、常に明確であり、彼は生涯、革命的芸術家として批判的機能を堅持した。理解されないことや、意見の対立

は常にあったが、未来の世代は彼に感謝するであろう」と積極的に評価する記事を掲載しました。また、文化省の映画専門のホームページ、「ラ・ヒリビージャ」では、追悼の記事が掲載され、『マラビジャス村のアリシア』が上映されると、数週間、ダニエルは困難に陥った。ダニエルは、生きて、苦しみ、しかし確固とした革命的立場からキューバ映画芸術・産業庁(ICAIC)も、その作品を制作した理由も擁護した」とディアス監督の芸術家としての姿勢を高く評価しました。ここには、芸術作品の評価を、大きな時間の流れの中で客観的に評価しようという、キューバの文化政策の成熟が見られます。

市場経済論の追求

一方、現在の改革は、キューバでは、「経済モデルの刷新」と呼ばれていますが、「経済改革」という言葉は、政治的観点から正式には避けられています。また、「党と革命の経済・社会政策路線」では、「社会主義計画制度は、国民経済の管理のためには引き続き主要な手段であるが、計画は市場を考慮する」とされています。キューバでは、一般に「市場経済」という用語は、資本主義と同義語に考える人が、政府の指導者も含めて少なくありません。



「対話しよう」の定例討論集会

また、この「刷新」の過程が、社会主義建設の過程の中で理論的にどのように維持づけられるかも規定されていませんでした。しかし、昨年、この「刷新」の過程の理論的規定を今年に行うといわれるようになり、今年になると、マルクス主義でいう過渡期とはどういうものか、過渡期における市場の役割はどのようなものか、などが積極的にテレビでも討論されるようになりました。

そうした流れの中で、9月、文化省傘下の「サイス兄弟協会」(35歳以下の若手作家、芸術家、知識人の会)が主催する「対話しよう」という公開の月例討論集会で、オスカル・フェルナンデス、ハバナ大学経済学部教授が、現在のキューバ経済を「市場経済」と呼んでもよいと述べたことが、注目されました。フェルナンデス教授は、若手の研究者らしく、市場経済という用語を大胆に使用して、改革の本質を指摘しています。

「これまで取られてきたすべての措置や、予告されている諸措置からすれば、公式にはどこでも述べられていないが、市場が主導的な役割をもつことは意味しないものの、市場がかなり全面的に機能するような経済に向かって、改革は明確な形で進んでいる。その経済は、『市場経済』と規定することができよう。このことは、必然的に資本主義経済を意味するものではない。この用語は、いくつかの混乱をもたらすものであることを、私は知っている。というのは、世間一般の人々にとって、この用語は、長い間『資本主義経済』と同義語であったからである。・・・

言い換えれば、キューバ経済は、極めて特異な市場経済となるであろう。というのは、その経済は、少なくとも三つの特徴的な要素をもっているからである。第一に、生産手段の国家所有が引き続き優先する——これは、これまでとは違ってより柔軟なものにはなるが、資本蓄積過程の社会的利用のためには最小限の条件である——ということが明白である。第二に、第一と矛盾することなく、その経済では、さまざまな形態と規模の私的部門が一層より広範に参加するものとなるであろう。第三に、以上のことからして、国家の規制のもとで、新たな、これまでとかなり違った形の関与ではあるが、社会主義への過渡期のような、この非常に不規則な過程において発展を保障する使命をもっている規制のもとで、経済は機能するものとなるであろう」。

自由こそ社会主義社会の本質

それでは、キューバでは、未来の社会主義・共産主義社会では、どのような社会が考えられているのでしょうか。現代キューバきっての人気作家のレオナルド・パドゥーラは、『犬を



愛した男』(2009年)で、スターリンの指令によりレオン・トロツキーを暗殺したラモン・メルカデルの生涯を描いています。メルカデルは、1960年にメキシコで釈放された後、メキシコ、ソ連に滞在した後、1974年気候の良いキューバに移住し、78年にキューバでガンにより亡くなりました。キューバでは、ハイメ・ラモン・ロペスの名前で滞在し、ハバナ市西部にある五番街をよく犬を連れて散歩していたといいます。パドゥーラは、徹底した資料調査を行い、スターリン時代のソ連を分析した結果、「ソ連の消滅による社会主義ユートピアの失敗は悲しいことであるが、スターリンの思想に基づいて作られたシステムは、消滅せざるをえなかった」と、本年

9月にスペインの雑誌で行われたインタビューで、スターリン体制を厳しく批判しています。

さらに、パドゥーラは、ソ連社会、キューバ社会の経験から、社会主義社会の本質が自由であることを喝破して、次のように述べています。

「社会主義制度の本質は、民主主義が最高に発揮され、人々が最高に自由に生きることだと思う。そうでなければ、社会主義制度ではない。したがって、いろいろな措置と法律が、社会主義制度特有の政治と哲学に矛盾してはならないのである」。

この適切な指摘は、マルクスが壮大な構想で描いた次のような未来社会に符合するものでしょうか。

「人の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の

支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である。この国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての必然性の国の上にもみ開花しうるのであるが——始まる」(『資本論』第3巻)。

キューバで出版されたパドゥーロの『犬を愛した男』(キューバ作家・芸術家同盟刊、2010年)の裏表紙には、「革命的指導者であり、共産主義理論家、レオン・トロツキーを、1940年夏メキシコでカタルーニャ人でソ連内務人民委員部(NKVD)のエージェント、ラモン・メルカデルが暗殺した事件」と、トロツキーを客観的に紹介しています。近年まで、キューバでは、トロツキーは分裂主義者、裏切者、修正主義者の代名詞であったことを考えると、こうした思想の面でも、キューバは変わりつつあることがうかがわれます。

(2013年11月11日 新藤通弘)